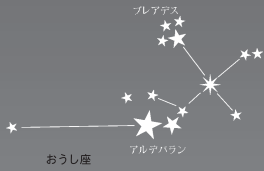


ポラリスを仰ぐ北の大地から



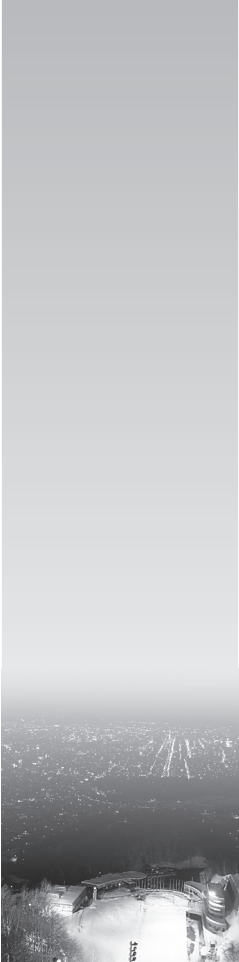
地域枠医師への期待

空知医師会 会長 明円 亮

地域医療構想会議が、全国で開催され議論が続けられている。

砂川市が所属する中空知医療圏でも、保健所の主導の下で、参加者が皆、実現性に疑問を感じながらも進行している。そのひとつが「在宅医療等の充実と医療従事者の確保」である。この地域で生活し、開業医として在宅医療に従事している人間としては、実現性に大いに疑問を感じている。中空知は、急激な人口減少と広大な面積のため人口密度が低く、しかも冬は豪雪地帯で、車の運転に危険を感じる日もある。訪問診療の移動時間が都会より大幅に長く効率が悪い。また、保険点数の高い在宅療養支援診療所は、算定要件が厳しく、高齢化が進み意欲の低い開業医にとっては難しい。また人口減少が著しいこの地域で、10年後、20年後の人口を考えると新規開業医が現れ、在宅医療を担ってくれる可能性も低いだろう。結局は「新たな在宅医療の確保」も公的病院にお願いするしかないのが現状である。砂川市立病院も医師が増えれば、対応していただけると聞いている。しかし、現在のこの地域の公的病院はどこも医師の高齢化が進み、医師不足に悩み、過重労働が問題となっている。

そんな中、平成20年から始まった地域枠医師制度にかける医師不足に悩む地方の期待は大きい。平成20年の制度開始時は、地域枠入学定員は札幌医大と旭川医大を合わせてわずか25名だったが、平成27年の地域枠入学定員は145名まで増えている。彼らが卒業し、医師が不足する指定公的医療機関に派遣される日も近い。増えた医師で公的医療機関に余裕ができ、在宅医療の需要を満たしてもらいたいと切望する。勤務医不足が続いている北海道の地域医療は彼らの活躍にかかっている。



カジノは必要ですか？

赤平市医師会 会長 郡 正博

いま日本では、カジノを数カ所開こうという話があります。

私もギャンブルはしましたが、麻雀をしても妻からネギを持っていきなさいと言われるくらい下手くそでした。パチンコも大学生の頃にやっていましたが、今のようになってからは、暇つぶしにもならずやめました。唯一、今でも続いているのが中央競馬です。今年も札幌競馬が始まり数万の人が集まります。私も数回は行きたいと思っています。

その私が実際にカジノを経験したのは十数年前シンガポールでの3泊4日の船旅が唯一です。食事の後、何も知らずにカメラを持って入ろうとして警備員に怒られました。私はスロットマシンしかできませんし、すぐにコインもなくなりました。妻の方が頑張っていました。ポーカーやルーレットにはたくさんの人が集まっていました。その場の熱気と興奮はものすごいものがありました。博打ですから日本でも同じような状態になるのは確実です。私たちは1時間もいないで外に出ましたが、多くの人は一晩中いるようです。

私は精神科医ですので、ギャンブル依存症の問題も頭をよぎります。普段はお金の限界、恐ろしさを知っている人でも儲かった時の喜びを知ると破綻が待っているのです。ギャンブルは勝ったり負けたりですが、少額の掛け金で多額のお金が入ってくる経験をする、いくら負けが込んできてもいつかは勝つと思ってしまうのです。さらに負けた時の悔しさもあり、とうとう借金をしてまでも通うようになります。そして自分だけでなく他人に迷惑をかけるようになります。博打は胴元が儲かるようになっていて、ハンディのあるものなのです。それなのにとうとう会社の金をつぎ込んでしまう人もいます。

君子危うきに近寄らず。カジノで国が潤っても誰かは破産します。

カジノは必要ですか？